

歩がとまつてしまひ遂に枯死するに至る。これではどうも面白くない。それから學校では兒童をして面白く學ばせやうといふので牛乳をかんでのませるやうな教へ方をやつて居る、即ち軟教育に陥て居るこれでは仕方がない。注入のみに馳せて啓發といふことがない。そこでこれ等の缺點を救ふべく自學主義といふものが起つて來た。自學主義……これを字義的に解してむやみに豫習を命じ兒童に獨案的の字引を買はせたりして得意がつて居るものがあるがこれ等は大に反省しなくてはならぬ。余は自學といふことを兒童をしてなるべく自己努力でもつて學ばせやうとするものと解する、換言すれば無意注意によりて學ばしめないうで有意注意によりて學ばせるやうにせよといふことであると思ふ。なるべく兒童をして活動せしめる、兒童の力で及ばない所を教師が輔導してやるこれが自學主義の眞髓であると信ずる。それであるから教材により或は兒童を先鋒として突進せしむることもあり、或は共に俱に進むこともあり、或は教師が先導してやることもある。たゞ兒童の力で出来る範圍内に立ち入らざるやう注意しなくてはならぬ。

余は自己努力によりて學ばしむるには先づ教授を獨斷法に馳せず啓發法にも

よるべきであると思ふ、否知的材料の場合及び高等科などに於ては啓發法を本體としたのである。それから次に復習……自動的の復習……を爲さしめ自學の基礎をつくつてやることが肝要である。それには家庭でやつて來いといふだけではいけない、學校で放課後一定の復習時間を取りその方法を指導してやらなくてはならぬ。

復習の要項は

- (一) 教科書をよく読んで見る。
 - (二) わけのわからぬ所はないかしらべて見る。
 - (三) 教科書の欄外の見出しについてお話しの出来るやうにする。
 - (四) 前のこととのつながりを考へて見る。
 - (五) 全體をまとめて見る。
 - (六) 年代表に重要事項を記入する。
 - (七) 試問法によりて互に練磨する。
- 以上の如くに定めて現今實施して居る。
復習に成功すれば豫習も自然出来るやうになる、これも學校に於て放課後にそ

の方法を指導してやることが肝要である。
豫習の要項は

- (一) こんど習ふ所を二三度通讀して見る。
- (二) わからぬ所をかきぬいておく。(字引によりてしらべて見る)。
- (三) 欄外の見出しを見て書いてあつたことの大體を考へて見る。
- (四) 教科書を見ないで大體をいつて見る。

尋常科では自力で字引などを用ひずしてしらせ、わからぬ所はわからぬとして疑問の状態で教室に臨ませ、高等科では自習辭典(獨案内にわらず)により出來得る限り自力にて解決をつけしめて教室に臨ましめる。教師は自習を基礎として教授して行くのである。自習せしめそれを出發點とせる教授にありては特に矯正といふこと……即ち兒童の解釋のあやまりを訂正してやること……これを十分にしてやらないと先入主となり誤謬が兒童の腦裏に深く根を下すことになるのである。なほ兒童のわからぬことを書きぬいて居る豫習帳は教授の終りに各自あやまりを訂正せしむるは勿論時々檢閲をしてやらなくてはならぬ。此の間兒童の豫習帳を點檢した所が文字のあやまりや解釋のあやまりなどの多いのに驚い

た。自學主義でやれば教師はらくをするといふ考をもつて居るものがあるがそれはあやまりである。兒童をして自學せしむればせしむる程教師の努力は増してくるのである。

第十節 複式學級の歴史教授

複式學級に於て歴史教授をするに教科書を如何に配當すべきかこれ研究すべき問題である。今普通に行はれて居る方法をあげて見れば左の如くである。

- (一) 兩學年を同程度と見做し甲乙兩學年度によりて教科書の配當を異にし同時に同教材にて授くるもの。
- (二) 書方圖書等を組合せ學年相當の教科書によるもの。
- (三) 教科書二學年分を一時に持たせ一課おきにして同教材を以て授け二學年に亘りて完結せしむるもの。

甲學年度	一……三……五……七……九……一……三……五……七……九
乙學年度	二……四……六……八……一〇……二……四……六……八……一〇

上古……中古……(卷一)……近古……近世……(卷二)

これ等の諸方案中何れを採るべきか以下批評を試みよう。

第一案は教師から見ると都合がよい即教授が容易である。然しながら兒童の方面からいふと順序を破つて進まなくてはならぬ組が出来その組は頗る迷惑である。殊にはじめて日本歴史を學ぶものに於て然りである。但高等科に於ては既に尋常科で一回やつて居るから此案によるも敢て差支はあるまいと思ふ。又第三案は時代系列を亂さぬといふ點がよい所であるが同時に二冊の教科書を持たせるのは考へものである。且實際教授をして見ると前後の關係上とばした所も淺くにせよ問答したり授けたりしなくては都合が悪い。かくすると勢教材が多くなつて練る方面がかけるといふ缺點に陥る。それから第二案であるがこれは歴史の時代系列を亂さず學年相當の教科書によるので教材のやりくりをするの面倒もなくすべての點から見てもよいと思ふ。但し組合さるゝ他學科例へば書方圖書の方へ手が十分行届きかねるといふことはあるがその進歩を害するといふ様な弊はないと信ずる。この組合せの利害につき嘗て研究したことがあるからそれを述べよう。

(一) 組合せ教授の短所

- (1) 歴史を書方圖書と組合せて教授する時は歴史が主となりて書方圖書は殆んど自習的となる。何となれば示範説明を爲すこと及び机間を巡視して指導矯正することは能はざればなり。
 - (2) 書方圖書の組のものが他組の歴史談に氣をとられ又繪畫標本などに注意を奪はる。かくて書方練習に専心なる能はず成績あがらざるに至る。
 - (3) 又書方圖書の方へ手を抜くよりして歴史の方は直接教授の時間減少し時に折角起したる感情も之れが爲め冷却さるゝことあり。
 - (4) 教授上管理上頗る困難なり。殊に歴史の直接教授の際書方圖書の組の管理亂れ易し。
 - (5) 未熟なる教師には此組合せ教授は望み難し。
- (二) 組合せ教授の長所
- (1) 組合せ教授を爲す時は兒童の心意發達に適したる材料によるを得べし。
 - (2) 時代系列を亂さず。
 - (3) 讀本の材料と連絡を保ち得べし。
 - (4) 書方圖書の組に及ぼす悪影響は實際憂ふべき程のものにあらず却つて練習

を十分ならしむることを得るなり。

(5) 歴史の方も書方圖書の方へ手を抜く際種々の方法によりて練習せしむるよりして児童は確實に事實を把握し彼の注入教授の如き弊に陥らず。

斯く論じ來ると一見利害相半ばするやうに思はれるが再見して其利の多きを知る。組合せ教授は他の方案に優る點が多々ありと信ずる。

さて然らば右三案中何れによるべきか。吾人の意見は左の如くである。

(一) 尋常科に於ては可成的組合せ教授を爲すべし。

(二) 高等科に於ては第一案によりて授くるも又第二案によるも可なり。

(三) 單級に於ては複雑なるを以て歴史は第一案によりて一組とし他組の書方と組合すべし。

(四) 第三案にはよらざるをよしとす。

歴史と書方又は圖書との組合せ教授に於ては示範説明批正のためには書方圖書の方へ手を抜く必要がある。その時に歴史の方を如何に處置すべきかこれ研究すべき問題である。以下之に關する吾人の研究の一端を述べて見よう。

(一) 時間のはじめに書方又は圖書の方へ手を抜く場合

(1) 復習的豫備として前回授けたる事實の問題を提出し之につきて記述せしむること。

時間のはじめ書方(圖書)の方の組が用意をして居る間に歴史の組の方へいつて二三の問答を試み終りに一問題を提出し之を筆答せしめる。その筆答の時間を進んで教授にうつるのである。又ぶつかりに問題を出し筆答せしめ一方の方の示範説明をすませることもある。

(2) 前回の個所をよましめて復習せしむること。

(3) 本日の個所を教科書によりて下しらせしむること。

書方圖書の示範説明を爲す時に歴史の方へ筆答せしむべき恰好の問題がないときは此方法によるべきである。

(二) 時間の中間に於て書方又は圖書の方へ手を抜く場合

(1) 板書の要項を筆記せしむること。

(2) 圖解又は讀史地圖を描寫せしむること。

(3) 板書の要項をたどりて、二三生をして復演せしむること。

(4) 教科書をよましむること。

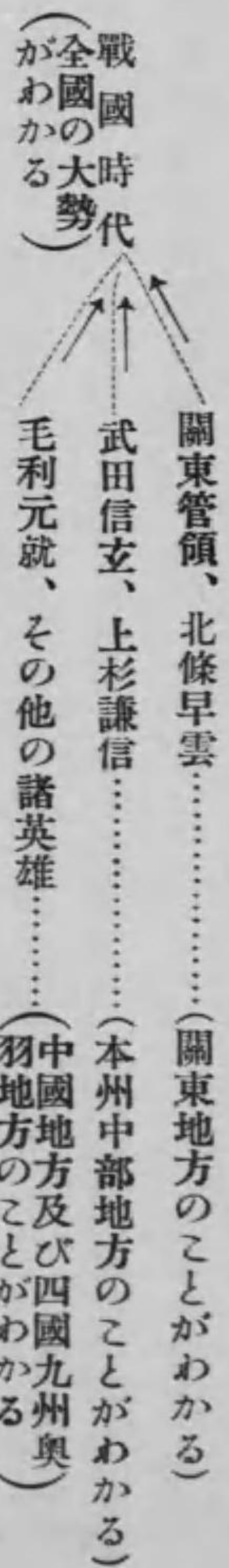
(5) 標本文は繪畫(繪葉書の如きもの)を觀察せしむること。
右の中にて要項圖解地圖の筆記が最もよい。それから一寸きりがよい所であつた時は教科書をよましむるのがよす。

- (三) 時間の終りに書方又は圖畫の方へ手を抜く場合
- (1) 教科書をよましむること。
- (2) 質問討議せしむること。
- (3) 略表をつくらしむること。
- (4) 要項を筆記せしめ圖解地圖等を描寫せしむること。
- (5) 大體を話さしむること。

手を抜くときの處置は上の如くであるがその回数は何れ位がよいかといふと歴史のはなしが餘りきれぬにならぬ範圍内に於て可成的多い方がよろしい。出来るなら始めと中間と終りの方とこの三回位望ましい。示範説明のいらぬ時は二回位清書の時は清書にうつる前一回位でよろしい。

第十一節 歴史教授と有機的統一

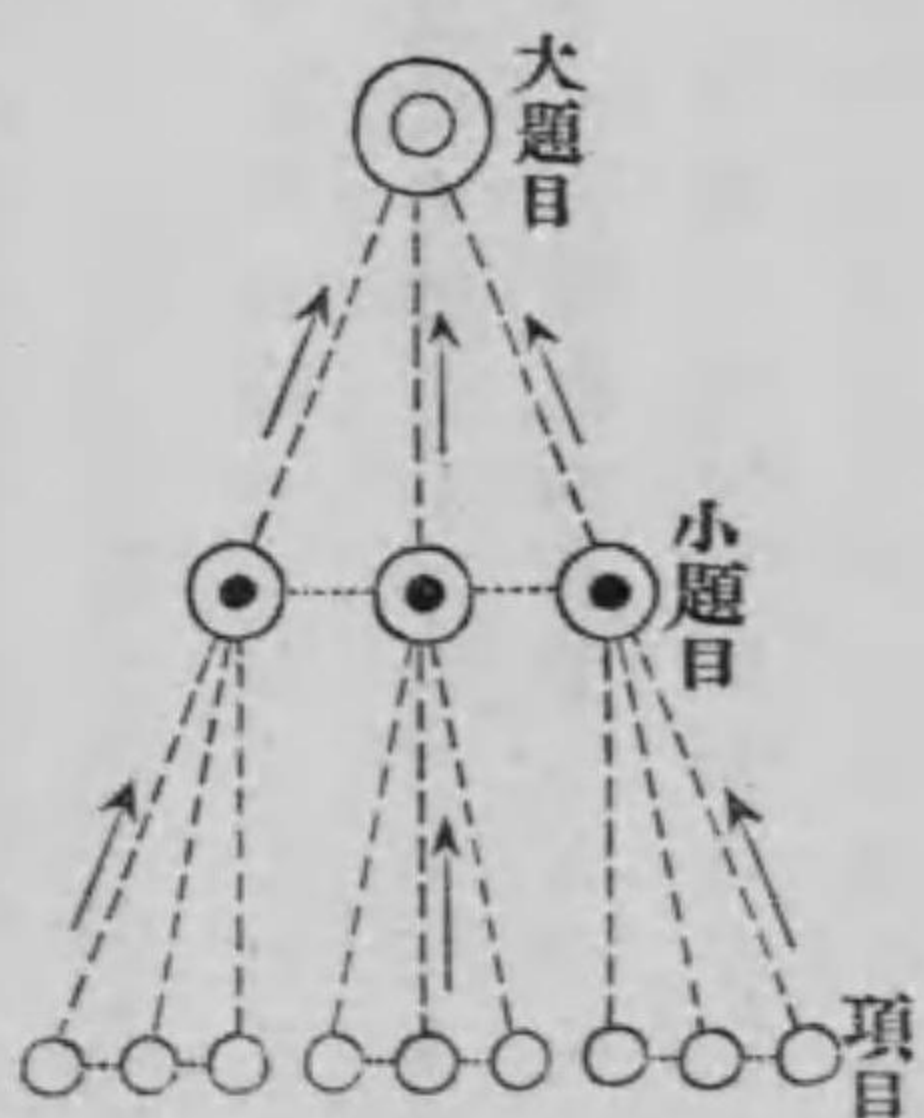
歴史教授に於て一課を數單元に區分して教授するときには各單元が孤立しないやうに、相連結せしめ一課の題目に歸結せしめなくてはならぬ。例へば戰國時代を授くるに先づ第一時に關東管領及北條早雲を説き、第二時に武田上杉の争を説き、第三時に毛利元就の經營及びその他の諸英雄につきて説きたりとせよ、然る時はこの三區分の各項目は互に相孤立せしめず相連結して大題目即ち戰國時代に結合せしめなくてはならぬ。



かくて始めて有機的統一があるといはれるのである。それを各小單元が孤立してしまつてはまとまりがつかなくて全體の大勢を達観することが出来ぬ。大勢を達観することが出来ぬとするところつまり明確なる知識を得たいといはれないのである。又一時間に於ける單元の小項目間にも互に有機統一あらしめなくてはならぬ。

まだそれだけでない、有機的統一につとめなくてはならぬ所は頗る多い。今之

を一般的に圖解で示して見やう。



- (一) 各単元の各項目間。
 - (二) 一課の題目と各單元間。
 - (三) 各課の題目間。
 - (四) 歴史全系と各課の題目間。
 - (五) 歴史と他學科の歴史的材料との間。
- それで各課題目でまとめ、次には歴史年代表を中心として各課題目をまとめることには大に つとめなくてはならないと同時に他學科殊に修身讀本中の歴史的

材料との連關統一につとめなくてはならぬ。尋常第四學年までの修身讀本中の歴史用材料は歴史の基礎觀念養成として利用し第五學年以上の歴史的材料は歴史の補習として活用したいと思ふ。第五六學年の讀本をしらべて見ると草薙劔坂上田村麿、紫式部と清少納言、菅原道真、松の下露、兒島高德、熊王丸、齋藤實盛、鳥居勝高、烈士喜劍、日本海々戰、水師營の會見等隨分一局部が詳細に敘述せられてある。これ等はどうしても歴史の補習材料として有力なるものであるから連絡をとつて歴史の内容を充實させたいのである。

さてかくの如く前後左右の連關をとるには細目の活用をしなくては到底駄目である。細目は裝飾的につくられ校長の所に秘藏せられて居つて訓導の方では細目があるかないかそんなことはお構なしですんじやつて居る。細目をつくるときには赤筋や青筋をたてて大議論をした先生までも出來上つたが最後細目を見むきもしないといふ始末……こんなことでは有機的統一はとれるものではない。余は更に細目の一層略な概覽をつくつて各受持訓導にもたせて活用せしむることが肝要であると思つて居る。

参考までに尋常科の歴史教授細目を掲ぐることにした。

一 尋常科第五學年

第一學期

週次	教授事項 (豫定時數)	準備事項	注意事項
一	第一、天照大神 天皇陛下の御先祖 大日本帝國 三種の神器 天孫の降臨 凡二時	天照大神の圖 伊勢神宮の圖 三種神器の圖	讀五ノ一あまのいはとと連絡 讀八ノ一皇大神宮 同二參宮日記の一節と連絡 讀九ノ一、二草薙の劍と連絡
二	第二神武天皇 神武天皇の大業 天皇の即位 凡二時	神武天皇の圖 東征地圖	讀五ノ三神武天皇と連絡
三	第三日本武尊 崇神天皇 熊襲の叛 蝦夷の叛 草薙の劍 凡二時	日本武尊の圖 東征地圖	讀九ノ一、二草薙の劍と連絡
四			

週次	教授事項 (豫定時數)	準備事項	注意事項
五	第四、神功皇后 神功皇后 三韓征服 學問技藝の傳來 凡二時	神功皇后の圖 三韓征伐の圖	
六	第五、仁德天皇 天皇の仁慈 天皇の勸農 凡一時	仁德天皇炊煙の上 るを見給ふ圖	
七	第六、物部氏と蘇我氏 家と職業 佛敎傳來と物部蘇我兩氏の争 凡二時	百濟王佛像を献ず る圖	
八	第七、聖德太子 太子の聰明 太子の攝政 支那との交際 佛敎の隆盛 凡二時	聖德太子の圖 法隆寺の圖	
九	第八、天智天皇と藤鎌足(一) 蘇我氏の專横 凡二時	天智天皇の圖	讀八ノ一五藤原鎌足と 連絡 一九五
一〇			

週次	教授事項(豫定時數)	準備事項	注意事項
一	入鹿父子誅せらる 大化の改新	藤原鎌足の圖	
二	第九、天智天皇と藤原鎌足(二) 凡三時		
三	大化改新の政治 三韓の離叛 蝦夷の服從 律令の制定 藤原氏の始	三韓地圖 蝦夷征伐地圖	
四	第十、聖武天皇 奈良京 佛教の興隆 光明皇后	平城京の圖 奈良大佛の圖 光明皇后の圖	讀五ノ六奈良大佛と連絡
五	第十一、和氣清麿 道鏡 和氣清麿の忠烈	和氣清麿の圖	

第二學期

週次	教授事項(豫定時數)	準備事項	注意事項
一	第十二、桓武天皇 平安京	桓武天皇の圖 平安京の圖	讀九ノ一八坂上田村麿と連絡
二	坂上田村麿 最澄と空海 平安朝の盛時	田村麿の圖 空海最澄の圖	
三	第十三、菅原道實 藤原基經 宇多天皇 醍醐天皇	菅原道實の圖 天滿宮の寫眞	讀九ノ二三菅原道實と連絡
四	道實の左遷 天滿天神 第十四、朝臣の榮華と武士の起		讀一〇ノ五紫式部と清少納言と連絡
五	朝臣の榮華 武士の起	朝臣歌舞宴樂の圖 藤原道長の圖	
六	藤原道長 後三條天皇	後三條天皇の圖	

七	院政 第十五、源義家 義家の父祖 前九年の役 後三年の役	陸奥地方の圖 飛雁亂行の圖	
八	第十六、平清盛(一)	平清盛の圖	
九	保元の亂 平治の亂	保元平治戰爭の圖	
一〇	源平二氏の盛衰		
一一	第十七、平清盛(二) 平氏の隆盛 重盛の忠孝と清盛の横暴	平重盛の圖	
一二	源頼政		
一三	第十八、源頼朝 源氏の蜂起 平氏の都落 源義仲の死 平氏の滅亡	源頼朝の圖 源平戰地圖 鎌倉の圖 源義經の圖	讀一〇ノ一五齋藤實盛 と連絡 讀五ノ二四、二五鶴越 の逆落と連絡

一五	源頼朝の天下平定 鎌倉幕府		
----	------------------	--	--

第三學期

週次	教授事項(豫定時數)	準備事項	注意事項
一	第十九、承久の亂 北條時政	源實朝の圖	
二	源氏の滅亡 後鳥羽上皇 六波羅探題		
三	第二十、元寇 北條泰時及時頼 北條時宗 蒙古襲來	元の領域圖 北條時宗の圖 蒙古襲來の圖	讀八ノ六松下禪尼と連 絡
四	第二十一、北條氏の滅亡 後醍醐天皇 北條高時	後醍醐天皇の圖 楠木正成の圖	讀一〇ノ二四松の下露 と連絡

五	勤王の人々 鎌倉幕府倒る	新田義貞の圖	
六	第二十二、武建中興 政權朝廷に返る	護良親王の圖 足利尊氏の圖	
七	足利尊氏の叛		
八	第二十三、吉野の朝廷 凡四時		
九	湊川の戦 吉野の朝廷 官軍の有様 京都の有様	吉野の朝廷時代圖 楠木正行の圖	讀七ノ一、二楠木正行と連絡
一〇	京都還行		

一 尋常科第六學年

第一學期

週次	教授事項 (豫定時數)	準備事項	注意事項
一	第一、足利義滿 義滿の幼時 凡一時	足利義滿の肖像畫 金閣寺の繪畫又は	

二	義滿の驕奢 第二、應仁の亂 凡三時 室町幕府の基礎固からず 足利義政 足利家の督争 應仁の亂 幕府の失權	寫眞 足利義政の肖像畫 銀閣寺の繪畫又は 寫眞 京都の古今圖	
三	第三、戰國時代 凡四時 英雄の割據 鎌倉管領と其末路 北條早雲 武田信玄と上杉謙信 毛利元就	英雄の肖像畫 英雄割據圖 戰國讀史地圖 戰國時代年代圖	讀六ノ一六上杉謙信と連絡
四	此外の諸英雄 第四、織田信長 凡三時 桶狭間の戦 幕府の衰微 朝廷の衰微	織田信長の肖像畫	
五	第六、信長朝廷興復の詔を受く		
六			
七			

八	秀吉の出世 凡四時	豊臣秀吉の肖像畫 日本全圖	讀六ノ一三、一四豊臣秀吉と連絡
九	秀吉信長の遺業をつぐ 秀吉全國を平定す 朝鮮征伐 凡四時	朝鮮征伐讀史地圖 豊公墳墓並に豊國神社の圖又は寫眞	修四ノ第五課より第七課迄參照
〇	第六、徳川家康 家康の出世 關原の戰 家康征夷大將軍となる 大阪の役 家康薨す 凡四時	徳川家康の肖像畫 關原讀史地圖 諸大名配置圖 日光及久能山寫眞	修五ノ五、仁と勇、同六、仁義を重んぜよ參照 讀二ノ七島居勝高と連絡
一	第七、徳川家光 幕府の制度整ふ 歐洲人の渡來と切支丹宗の傳來 切支丹宗の禁制 海外渡航の禁制と島原の亂 凡三時	徳川家光の肖像畫 世界地圖 南蠻人渡來の圖 原城の位置を示す 圖九州地圖 踏繪	修三ノ一〇春日の扇の話參照
二	家康の出世		
三	家康薨す		
四	幕府の制度整ふ		
五	海外渡航の禁制と島原の亂		

鎖國

第二學期

週次	教授事項 (豫定時數)	準備事項	注意事項
一	第三、徳川綱吉新井白石 學問の復興 綱吉の弊政と元祿時代 新井白石皇族出家の先例を廢せんことを建議す 白石朝鮮の使者待遇法を改む 白石財政に注意す 凡三時	大成殿の圖 新井白石の肖像畫 元祿時代の風俗畫	修五ノ二〇二二、中江藤樹の話參照 讀二ノ二二烈士喜銀參照
二	第九、徳川吉宗 徳川吉宗將軍となる 吉宗の政治 吉宗心を産業に用ふ 凡二時	徳川吉宗の肖像畫	修五ノ一八、勉學、一九、朋友(新井白石)參照
三	第十、尊王論 松平定信 凡五時	徳川光圀肖像畫	修四ノ二三法令を重ん
四			

五	水野忠邦 朝廷と幕府との關係 尊王論漸く起る 國學 慷慨家出づ	松平定信肖像畫	ぜよ、修五ノ一七、習 慣(松平定信)參照
六	第十一、外艦の渡來と攘夷論 攘夷論起る	國學者及寛政三奇 人の肖像畫	修六ノ一〇、一一、職 力を養へ(高田屋嘉兵 衛)參照
七	和親條約の締結 通商條約の締結 櫻田門外の變	米使渡來の繪畫 久里濱なるペルリ 上陸紀念碑の繪畫 又は寫眞 櫻田門外の變の圖 孝明天皇御肖像畫	修三ノ一六、一七、皇室 を尊べ參照 修六ノ一五、獨を慎め (林子平の話)參照
八	下關の外艦砲撃と長州征伐	維新戰亂讀史地圖 維新の戰亂を示す 繪畫 維新の勳功者の肖 像畫	修四ノ二天皇陛下參照
九	大政奉還	西郷盛隆、谷干城 の肖像畫	修四ノ三忠君愛國(谷 村計介の話)參照
一〇	維新の大業成る		
一一	第十三、臺濟征伐と西南の役		
一二	新政府の外交方針		
一三			
一四			
一五			

第三學期

一	臺灣征伐 征韓論 西南の役	隆盛終焉地及墓の 繪畫又は寫眞 西南戰役讀史地圖	
二	第十四、憲法發布 公議輿論の採用 皇室典範及帝國憲法の發布 帝國議會の開會	憲法發布式の圖 伊藤博文肖像畫 貴衆兩院の圖	修六ノ四天皇陛下參照
三	第十五、明治二十七八年戰役と條 約改正 朝鮮と修好條約を結ぶ 朝鮮事變と天津條約 日清の開戰 下關條約と遼東還附 臺灣平定 條約改正	東亞地圖 二十七八年の戰局 地圖 日清戰役に關する 繪畫又は寫眞	讀七ノ二六廣瀨中佐及 讀八ノ二四、二五橋中 佐と連絡 修四ノ二北白川宮能久 親王殿下參照
四	第十六、明治三十七八年戰役	東亞地圖	
五			

六	北清事變	凡四時	三十七八年の戦局 地圖	
七	日露間の交渉と日英同盟		奉天戦局地圖	
七	日露の開戦と我軍の勝利		日本海海戦を示せる圖	
七	第十七、平和條約と韓國併合	凡三時	日露戦役に關する繪畫又は寫眞	讀十ノ一二水師營の會見及讀十二ノ二日本海々戰、同一五南滿洲鐵道と連絡
八	平和條約の締結			
八	樺太及租借地の經營			
九	韓國の保護と清國領土の保全			
九	日英同盟の擴張と日佛日露の協約			
九	韓國の併合			
九	國民の覺悟			
一〇	全體の總括	凡二時	東亞に於ける各國勢力範圍の圖	

第十二節 現今歴史教授の缺陷

余が眼に映じたる歴史教授の缺陷の重なるものを掲げて見やうと思ふ。讀者にはかかる缺陷はあるまい。

(一) 歴史教科書の編纂趣意書を讀まざるものあり。編纂趣意書を讀まなければ教科書の組織如何はわかるものでない。従つてその取扱を適當ならしむることは出来ない。余はこの趣意書の研究を大にすすめて居る。文部省によりても今少し趣意書の公刊を速にしてみらひたいと思ふ。

(二) 教材の研究足らず。教材をしらべないで誤謬を教へるものがある。教授日案を丸寫しして教壇に立ちそれを見つつ教へるものがある。又教科書を讀書的に授けてしらぬふりして居るものもある。地方的材料の活用をせずしてうちやりにやつて居るものもある。かくては徹底せる教授は望まれない。教材の研究には大につとめなくてはならぬ。

(三) 教材の性質に應じて適當なる取扱を爲さざるべからざるに千遍一律なるもの多し。尋常科と高等科の場合に於てその取扱の方法異なるべきは既に述べた所であるから茲には省くことにして、同じ尋常科又は高等科に於てもその材料の性質の異なるにつれて多少その取扱の方法を異にしなくてはならぬ。人物を題目とせるも

のにありては、人物の傳記を明にし、その人物が代表せる時代を示し、更にその行動につきて道徳的判斷を下さしめなくてはならぬ。出來事を題目とせるものによりては、事件の經過原因結果の關係、事件に關係した人物の事蹟時代と事蹟との關係を明にし、更にその事件についてその原因經過結果に對して善惡正邪を判斷を下さしむべきである。又政治的の材料と開化史的の材料もそれ／＼力の入れ所を異にしなくてはならぬ。それをどの材料もどの材料も同じ取扱にしては教授は形式に馳せて兒童の腦裏に徹底しない。

(四) 直觀方便物の活用十分ならず。

歴史教授をして現實的ならしめ印象を深からしめんと欲せば直觀方便物即ち實物、繪畫、寫眞、模型、地圖、年代圖等を巧に利用しなくてはならぬ。現今缺陷と思つて居る點は左の如くである。

- (1) 繪畫の選擇に心を用ひず、又之を利用する時提出の時機適當ならざるもの多し。
- (2) 年代圖の適當なるものなし。
- (3) 讀史地圖を使用せず、屢氣樓的に説話するもの多し。

(4) 教科書の挿畫を研究せずして之れを有効に利用せざるものあり。

これ等は一日も早く改善したいものである。

(五) 教授が講演に馳せ推究問答不足す。

歴史教授が講演に馳せて推究的問答の不足せるは現今多く見る所である。高等科などに於ては既に尋常科で一通り歴史を學んで居り、又豫習もして來て居るにもかかはらず、注入的に教授するものあるは頗る遺憾とする所である。何が、如何にして、何故に……と進まなくてはならぬ。講演的注入的では教授が上走りとなり、漠として居て兒童は明確なる把握を爲すことを得ない。

(六) 板書が多くして口頭練習少し。

板書が無暗に多くし、教師は常に黑板の方を向いて教授をする。兒童に教授せずして黑板に教授して居る。これでは仕方がない。圖解を研究し、板書はなるべく簡約にして口頭練習を多くすべきである。

(七) 教科書の取扱粗漏なり。

講演に多くの時間をとり、その上に要項を筆記せしめ、爲めに教科書取扱の時間が殆んどなくなつて、教師は歸つてよく讀んでお置きなさいと兒童に宣言して難

關を逃れる。こんなことも屢々見た。あのむづかしい文章の歴史の本をただ歸つてよんでおけばものたりない。教科書はもつと丁寧に使用してもらひたい。

- (1) 豫習を爲さしむべし。
- (2) 教科書を讀ましめ之を教授の出發點とすることもあるべし。
- (3) 説話の終りにはよく讀ましむべし。
- (4) 龍頭の小題目を見て大體を話さしむべし。
- (5) 復習を爲さしむべし。
- (八) 有機的統一を缺き全系統の達觀を缺く。

各單元各課の史實が孤立して居てまとまりがつかず、又各時代の達觀全系統の通覽といふことが十分でない。これ等は年代圖により或は兒童をして年代表をつくらしめたりしこの缺陷を救済しなくてはならぬ。而して現世の理解を爲さしむることが肝要である。

以上は余の見たる歴史教授の重なる缺陷である。齋藤高師教授は教授法の改良は一面に於ては學力の豊富によりて慥かに之を成し遂ぐる事が出来るとし、教授法の巧拙により歴史教員を左の如く分類せられて居る。即ち左の如くである。

第一期

學力の修養未だ十分ならず教材を讀んせざる所あり辛うじて教科書を説明し得るもの。

此の時期に屬する教師は讀書的教授に陥り一句若くは一章を讀みつゝ解説するなり故に其の教授の形式は殆ど國語と區別する所なく其の教授至つて無味乾燥にして間々生徒の腦裡に徹底せざる所あり教授法は最も拙なりとす。

第二期

教師は日常學力の修養に怠らず研究的態度を以て學科内容の攻究に勉むるを以て教授の材料頗る豊富なれども未だ教材に讀んせざる所あり教授の際 *Book* を見つゝ講演し若くは板書し其の教授する所繁鎖に過ぎ材料過剰なり而して教授の形式は多く講義式若くは板書の教授にして教師は生徒に向つて發問すること少く注入に傾き生徒は全く受動的にして自ら活動することなし故に教場に於て生徒をして正確なる知識を把握せしむること能はず教授法としても第一期に比し稍々優る所あれども未だ至らざる所ありとす。

第三期

學力豊富にして其の造詣する所深く能く教材に暗んずるを以つて殆ど教科書をも参考書をも見ることなく其の教授する所は悉く教師の腦裡に整頓せられ其の教材過剰に失することなく能く教科書にある事實を Organize し巧みに問を發し生徒をして或は前に學べる所を復唱せしめ或は推理判斷せしめ能く史實の Causality を考索せしめ教場にある間に正確なる知識を收得せしむるなりこの期に達せる教師は決して生徒をして筆記に忙殺せしむることなく沿革地圖と繪畫とを巧みに利用して當代の真相を洞察せしめ得るなり是に至りて所謂博く學んで之を約にするの域に達せるを見るなり之を教授法の上乗となす。吾人は氏の所謂第三期の域に達すべく努力しなくてはならない。

第十三節 歴史教授の研究

教授は机上の空論のみではうまく出来るものではない。實地授業をして多くの人より批評してもらひ研究に研究を加へて行かなくてはならぬ。殊に歴史教授の如き重大なる任務を負へる教科にありては教師たるもの大に努力研究する所がなくてはならぬ。一校又は數校聯合して實地授業を中心として諸種の問題

を研究するがよい。

- (一) 尋常科の場合。
- (二) 高等科の場合。
- (三) 人物を題目とせる場合。
- (四) 事件又は時代を題目とせる場合。
- (五) 政治史的材料の場合。
- (六) 開化史的材料の場合。

等種々の場合を一々研究して行つたら有効であらうと思ふ。一體研究教授といふものが形式に馳せなるべく批評のないやうにと批評逃れを主にしてやるものであるから役に立たぬ。研究問題を包含したるものでなくはならぬ。それから參觀し批評するにしてもなるべく美點を見出し自己の研究に資するやうにしなくてはならぬと思ふ。我が校に於ては批評要項を左の如くに定めて居る。

- (一) 教材
 - (1) 教材に誤謬なかりしか。
 - (2) 教材の種度分量は適當なりしか。

(二) 教材の分節は適當なりしか。

教法

- (1) 豫備は適當なりしか。
- (2) 目的指示は適切有効なりしか。
- (3) 教式及び教授の段階は教材の性質によく適合せしか。
- (4) 教師の言語態度に遺憾の點なかりしか。
- (5) 直觀方便物の取扱及び實驗は適切有効なりしか。
- (6) 教授は要點を逸することなく兒童に理解せられしか。
- (7) 發問及び答辯の處置は適當なりしか。
- (8) 個人的取扱は十分なりしか。
- (9) 教案に抱泥し教授の生氣を殺ぎしことなかりしか。
- (10) 教授事項は練習應用よく兒童の心裏に徹底し明確に收得せられしか。
- (11) 當初の目的は十分達せられしか。

(三) 管理訓練

(1) 教室内はよく整理せられしか。

- (2) 採光通氣は遺憾なかりしか。
- (3) 兒童はよく命令を守り學習に熱心なりしか。教師と兒童の密着の程度如何。
- (4) 兒童學用品及其の取扱の遺憾の點なかりしか。
- (5) 兒童に厭ふべき習癖なかりしか。

(四) 總評

- (1) 特に感じたる點。
- (2) 採りて以て範と爲すべき點。
- (3) 自己反省の資料。

研究授業後には批評會を開き研究問題につき意見を交換する而してその結果をまとめる。採用すべきは採用し。將來研究すべきは研究する。かやうにして始めて効果があるのである。赤筋や青筋を立てて議論し、嘲罵冷評破壊して快哉を叫ぶやうでは大山鳴動して鼠一疋の類で面白くない。時には左の如き用紙を配布し各自批評を記入しそれを總代がまとめて批評することもある。

熊本縣師範學校附屬小學校批評用紙 (明治四十年 月 日)

科 第 級 科 教 授 批 評					教授者 氏名	視察者 氏名
評總	他其	童兒及師教	法 教	材 教		

左は澤村訓導の研究授業の教案である。このときは、人物を題目とせる場合の

取扱、教科書の活用、板書法の研究等が主なる研究問題であつた。

尋常科第二學級第五學年歴史教案

第二學期第五週 金曜日第二時 教授者 澤村 武雄

(一)教材 尋常小學日本歴史卷一 三十六頁三行より三十九頁四行、醍醐天皇、道真の左遷天滿天神

(二)目的 (1)菅原道真左遷の事實之に依て表れたる道真の誠忠に感せしめ我が國民の真髓たる忠貞の志操を陶冶す。
 (2)醍醐天皇の御事蹟を知らしめ又道真の左遷に依て天皇をかりそめにも誤解し奉る等のことなきを注意す。

(三)準備 歴史年代圖、日本地圖、太宰府繪葉書。

(四)方法

豫備

(1)既習事項の復習

目下學習の題目 當時の天皇、其の年代、當時の菅原道真

板書事項

- 時勢天皇の御賢慮道眞の苦心、道眞の將來
- (2) 目的指示 本時は道眞公が左遷され給ひながら尙ほ片時も君を忘れぬ給はぬことを主として調べん。

提 示

(1) 醍醐

(教科書讀講)

- (イ) 宇多天皇位を皇太子に譲り給ふ。
 (ロ) 教科書を讀ましめ後ち要領復演。
 (2) 道眞の左遷……講話
- (イ) 道眞と時平と年齢才學事務。
 (ロ) 少壯氣鋭なる時平の心中推想時平以外に道眞をねたむ心のあること。
 (ハ) 時平同志者と道眞を讒す。
 (ニ) 道眞に左遷され藤氏益々勢を得。

宇多天皇
千五百年代

醍醐天皇

宇多天皇の皇子仁慈の

御心深し

道眞 右大臣

時平 左大臣

道眞の左遷

道眞御信任殊に厚し

時平 不平

ネナム人々 天皇に讒す

筑前の大宰府藤原氏益

勢を得

以上の復演 一回

(3) 左遷後の道眞

- (イ) 兒童に話さしむ。(讀本第二十二課の觀念)。
 (ロ) 挿畫取扱——實況想見。
 (ハ) 忠誠の行爲につき賛辭。
 (ニ) 薨去並に死後の榮譽。

左遷後の道眞

薨後

天皇……高き官

世人……天満天神

整 理

- (1) 教科書讀講。
 (2) 教科書と板書との結合。
 (3) 筆記並に豫習整理。
 (4) 要領復演。
 (イ) 左遷後の道眞 (ロ) 左遷の理由。 (ハ) 當時の天皇、天皇の御人となり。
 (5) 綜合的復演。
 (6) 應用的問答。 (イ) 死後世人にわがめられ慕はるゝ點。 (ロ) 道眞の如き忠臣。
 (ハ) 清麿との比較。

第十四節 余がとりつつある教授の方針

教授法に關して近頃種々の主義があらはれて居る。そして甲を主張するものは乙を排し、乙を主張するものは甲を批難し、實際家をして五里霧中に惑はしむるものあるは頗る遺憾とする所である。

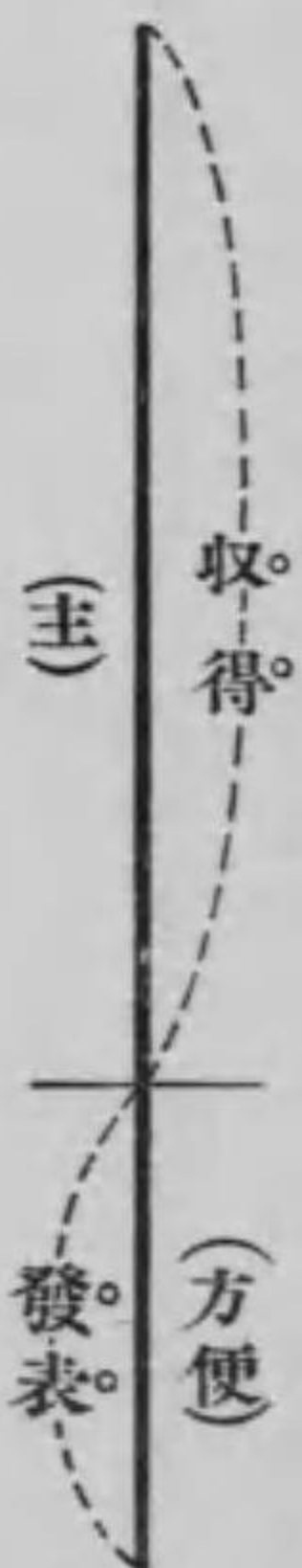
直觀主義、段階主義は教師中心の教授であるといつて無闇にわろくいふ。軟教育であるといつて排斥する。しかしたしかによい點を含んで居る。

自學主義發表主義は兒童中心の教授であつて從來の缺陷を救済する方便としては大變よろしいのであるが無闇に盲信して最も進んだ教授法の如く思ひ込むのは如何かと思ふ。地方などでは自學とか發表とかいふことを字義的に解釋して、その眞髓をとらへてゐないことを往々見受ける。例へば發表主義を發表の二字にとらはれて、十分教へ込まない即ち理解せしめないで、おいて「そら今のをいつて見よ……これをやつて見よ」とせめつける。兒童は發表し得る筈がない。たゞ時間を徒費するのみである。さて同じく發表といつても、學科によりてその趣が多少異つて居る。即ち發表に輕重の差がある。

(1) 發表を目的とするもの……圖畫、手工、體操、唱歌、書方の技能科。



(2) 發表を方便とするもの……地理、歴史、理科、算術等の知的教科。



發表的の教科に對し、新らしき材料を知得せしむる爲に作られたる教授の段階を其儘適用せんとするは其當を得たものでない如く、取得を主とし發表を方便として用ふべき知的教科を主とせるもの、如く取扱ふはあやまりであるといはなくてはならぬ。

それから自學主義であるが、之を單に豫習させるのが本體の如く解し、兒童に「豫習して來よ。よくしらば來よ。」と命ずる。兒童は家庭で父兄に教はつて來る。さうすると教師は自學主義であるといつて喜んで居る。

家庭であつても、父兄に教はつたのは失張教授を受けたので自學ではあるまい。父兄の多忙な家、或は父兄の教育程度の低い家では、児童は仕方がないから何々詳解とか、讀本字引とかいふ獨案内のものを使用する。これより起る弊は又大なるものである。といつて余は自學主義を排除するものではない。たゞ世の人によく／＼その内容をしらべてこの主義によるべきことを警告するのである。自學力なき抵學年兒童に下讀を強い、獨案内のものを使用せしめて、その時間花々しくやつてのけるを喜び、教師の勞を省かんとするが如きは大に排斥しなくてはならぬ。

かく各主義にはそれ／＼長所と缺點とがある。よく研究して實施すべきである。徒にかぶれ模倣するのは危険である。模倣は遠藤博士著社會學講話に

「聞く所によれば、英吉利の或る貴族が頸に腫物が出来て少し醜いので、カラーを高くして掛けた所が貴族がカラーを高くして居ると幾らか見た所が宜いといふので、之を真似する者が出来て、それから非常に流行したといふ事である。真か嘘かわからぬけれども、兎に角先例が一つあつて、それが非常に流行し始まるものである云々」

とあるが如く傳播速なると同時に一人より他人に傳はり一國より他國に傳はる時に元の状態を存することは稀で、幾分か原形を變ずるものである。即ち屈折をするものである。我國の所謂教育の新思潮なるものにはたしかにこの屈折なる法則が行はれつゝあると信ずる。十分慎重の態度をとり各主義は大なる「教授河」の一支流に止まるものであるとの確信を持つべきである。本流を見ずして支流に走り、昨迎へ今廢し、轉々うつり行くはあまり感心したことはない。そこで余は教授につきては、大要左の如き方針を標榜し、之に準據しつゝあるのである。

(一) 教授の精神を確立せよ。

有効なる教授を爲さんと欲せば第一に着眼點の正鵠を期すべきである。

(1) 小學校令施行規則の各教科教授の要旨。

(2) 國定教科書編纂趣意書。

(3) 國定教科書教師用書の注意がき。

等はよく熟讀翫味すべきである。國定教科書編纂趣意書も見ずして教科書を取扱ふは、恰も「やみに鐵砲」である。又注意がきは文辭簡單であるから、よく之を輕視する傾きがある、これは遺憾なことである。それから一教授單元中の主眼點を洞

察看破しなくてはならぬ。主眼點を失したる努力は努力する程岐路に入り、効果は水泡に歸するのである。

(二) 教材を研究せよ

教材に關する教師の知識の深淺は教授の效果に多大の影響を及ぼすものである。教師たるものは各科にわたつて廣く深く且密なる知識をもつてなくてはならぬ。そして常識に富んで居ることが必要である。常識養成には

(1) 捨て目。

(2) 捨て耳。

(3) 捨て手。

をしなくてはならぬ。捨て目といふのは自己専門以外のことでも見ておけといふことである。捨て耳とは役に立たぬと思つても他人の説はきいておけといふことである。さうするといつか役に立つ時が来る。そして見たこときいたことを一寸ノートに記して置くこれが捨て手である。かくすると常識が豊富になるのである。上述の如くすることは頗る肝要なることである即ち教材研究が大切であるが茲に注意すべきはその調査研究したるすべてを兒童に注入する……

佐々木教授の言をかりていへば「決算報告」……この決算報告は避くべきである。明日教授をするといふことになる、その晩はいろ／＼の教授書、参考書からひきあつめて来て當日壇上より滔々と報告。兒童は啞然として居る。それを教師は兒童が大に自己の話に感入して居るのであると思ひ、益々口角泡を飛ばす。これでは兒童に明確なる知識を得せしむることが覺束ない。硬教育といふことを屈折して解し、多慾主義で注入するの傾向は面白くない。余は教材研究に對しては、

(1) 真相を探究せよ。即ち教材のあやまりなきを期せよ。

(2) 真相の一部分をとれ。即ち教材を精選せよ。

(3) 兒童の程度に合すべし。

との三つを要求する者である。而して教材に對しては信念を持つて教壇に立たなくてはならぬ。教材研究を十分にせず人偏に言と云ふ信でなくして雨冠に辰といふ「震」の字……「自震」を以て教壇に立つと必ず參觀人が来る。教益は益々自震の度を高める。校長や郡視學に視られた時は授業後昨夜はいろ／＼多忙でしらべる暇がなかつたとか「今日は天氣がわるくて」とか辯解を爲し又自震をやる。即ちゆりもどしをする。この様なことがよくある。これは大に警むべきである。

(三) 明確に授けよ。

教材研究が出来たら、之を兒童に明確に授けなくてはならぬ。明確に授くるには教授法の研究が必要である。世には往々研究萬能を信じて、教授法研究を非常に輕視する者がある。余は教材研究の肝要なることを認めるものであるが、これが爲に教授法研究を輕視するものではない。これにつきて一二議論をしたこともあつたが昨年一月號の教育研究第九拾四號の主張は、恰も余の主張の或部分と符合して居たので非常に愉快に感じた。その主張といふのは、近頃好んで異説を立て自らを欺き亦人を誤るものがある。即ち

- (1) 教育は人格にありて死法にあらず。法の末に流れて人の本を忘る。
- (2) 學力は主腦にして方法は末技なり。學力だにあらば方法は自ら生ずべし。
- (3) 方法の研究盛にして御膳立のみ立派に、却つて學生をして意氣地なくならしむ。
- (4) 方法倒れになりて學力つかず。

等種々の言を爲し、教育社會に於ける方法の研究を冷笑せんとするものがあるが、學力の抵落意氣の軟弱はその原因別に之あり、之を教授法研究に擬するのは誤ま

つていふといふのである。

余は方法研究につきては、先づ次の如き要求を爲すのである。

(1) 教材の性質に應じ適當なる教式を採れ。

これは説明するまでもないことである。第二には

(2) 直觀的に授くべし。

直觀的に授くべしといふことは頗る必要なることである。殊に尋常一年の如きは此點に深く注意を拂はなくてはならぬ。直觀的に教授するには三つの注意すべき件々がある。その第一は

(イ) 言語

である。言語は簡明にして勢力あり、高低及び速度は適度でなくてはならぬ。一天叢雲かきくもりピカ／＼とひかつたと思ふとゴロ／＼／＼と驚くばかりの雷鳴がしたといふにしてもピカ／＼をす高くいひゴロ／＼／＼を低くいつては大きな雷鳴の様には聞えない。又、まん丸窓の梅が枝に鶯が来てホーホケキヨと鳴いたといふにしても梅が枝に鶯が来てとやさしくいつてホーホケキヨを大きな聲でとなつては鶯が腹立てたかの様にきこえる、言語は餘程大切である。それか

ら多辯はいましむべきである。女教師は一體多辯で要領を失するの傾向があるやに思ふ。今一つは言語は平易なれ然かも方言を用ふるなといふことである。一年生に向つてよく観察するのですよ。表面のみならず裏面側面すべての方面より観察しなくてはなりません。とか然り而して「豈それ然らんや」とかいつては何のことだかわからない。しかし方言を用ひてはならぬ。標準語を授くる時に之を理解せしむる方便として用ふることはあるが、それは方便であつて、本體としては方言はよした方がよい。要するに言語を巧に使用して實況を描き出す。明確に理解せしめるといふことに勉めなくてはならぬ。次に

(口)態度

沈着にして機敏なれ。活氣あれ。友愛の情を以て兒童に接せよといふことは今更喋々するの必要はあるまい。たゞ手真似や身振を以て言語の及ばざる所を補へといふことは餘程研究する餘地があると思ふ。人が萬歳といふ時には必ず手を上へあげる。「そらいけ〜」とはやし立てる時にも上げる。所が落語家などがなまぬくい風が吹いて来て柳の枝が動くを見ると「ドロ〜」と幽霊が……などいふ時には必ず手を下へ向ける。即ち掌一枚で陰陽のつかひわけをするのであ

る。また頸なども餘程表情に關係がある。若し女子が天を仰視して足を外八文字形にしてあるくなら女權擴張論者に見えるが、少しく伏目になつて足を内八文字形にして歩ませ給ふ時は淑女のおもかけがある。又頸を少し左か右に傾けて伏目になつたら何事か思はせ給ふといふ風になり。あまり前に傾けて襟をつんとあとへ出すと藝者風となりて下卑て来る。頸一つのつかひわけで斯様に様々のあらはれとなる。十分研究しなくてはならぬ。それから

(ハ)教具を活用せよ。

適當なる實物、繪畫、標本、模型、寫眞を準備し、之を巧に活用し、明瞭確實なる觀念を興へ、興味を喚起するにつとめなくてはならぬ。活用上注意すべきは、

(A) 提出の時機の適切なるべきこと。

(B) 有効に利用すること。 漠たる全體より、部分に及び部分と全體との關係をとり、全體を理解せしむることは殊に必要なり。

(C) 撤去の時機の適當なるべきこと。

等の諸點である。

それから此等諸教具の不足點は、黑板畫を以て補ふことに務めなくてはならぬ。

(3) 注入に馳せず適當に問答法を用ふべし。
一分節終る毎に復演すべく、問答を怠つてはならぬ。問答をすることは種々の點に於てよろしい。

先づ兒童の側より見ると

(イ) 兒童をして教授作用に參與せしめ、間斷なく活動せしむるを以て注意活潑なり。

(ロ) 兒童の觀念を確實にし、思辨を促し、自動の獎勵となる。

(ハ) 兒童をして自力を自覺せしむ。

次に教師の側から見ると、

(イ) 適切なる教授を爲すことを得。

(ロ) 教授効果如何を知り反省に資するを得。

(ハ) 兒童の個性を知るの機會を多くす。

これ等は其の價値の主なるものである。次に問答につきては注意すべき點を示して見やう。

問	答
1. 用語は平易簡明正確なるべし。 2. 兒童の程度に合すべし。 3. 時機適切なるべし。 4. 單調を避け趣味ある形式を以てすべし。再三くりかへす勿れ。 5. 答を含める發問は避けよ。 6. 指名は偏する勿れ。	1. 答の言語は明瞭正確なれ。 2. 雷同又は偶中のものは避くべし。 3. 半ば正當なるものは誤まれる點につきて反省せしめ發見せしむべし。 4. 答のあやまれる時はその原因を探究すべし。 5. あやまれる答に對し嘲笑すべからず。 6. 答を利用すべし。

(4) 板書を簡明にすべし。

板書をくだしく繁雜無秩序にすると教授は緩漫となり、時間を空費し、ために明確なる教授は出來ない。余は板書に圖解法をなるべく多く利用して此缺點を救済して見やうと常に研究しつゝある。兎に角板書は正確簡明迅速にして教

授事項を理解せしむる一方便としなくてはならぬ。

(四) 練習を軽視するな。

教授したことを十分收得せしめ、記憶を確實ならしめ、應用自在ならしむるには練習といふ事が必要である。難教材に於ては殊に然りである。要點を把へ反覆練習するといふこと……これは新奇の方法を立て、突進のみを事とせる今の教授界に最も多くの反省を促したい點である。余は練習につきては、三つの要求がある。

(1) 練習の時間を多くすべし。

といふのがその一である。練習の時間を多くするには。

(イ) 豫備を簡單にし、之に多くの時間をとらざること。即ち簡略主義をとること。

(ロ) 教授の材料を多くせず、精選せるものを授くること。

(ハ) 徒に形式に拘泥せず、臨機の處置をとること。

(ニ) 時間を經濟的に使用すること。

等につとめなくてはならぬ。殊に豫備は提示に入る方面であるから必要なるも

のに止め、まはり遠きことはよして早く提示に入るべきである。これまでの教授は老人が途中で逢ふと今日はよいお天気で、昨日も……この間は大變な雨で……など今日の天気昨日の天気一昨日その前と一週間位の天氣の復習をやつて、そして實は……と提示に入る様に……全く老人的タイプであつた。三角形の底邊を上にしたるが如き頭のみ堂々として、大切な所で力が抜けてしまふ。これは最もいましむべきである。練習の時間が多くあるやうにしなくてはならぬ。それから。

(2) 練習には變化あるべし。

練習は兒童が乘氣になりにくいものであるから、練習の方法に變化あらしめて、かゝることのないやうにしなくてはならぬ。或は言語により、或は筆答せしめ、或は繪畫圖解等により發表せしむべきである。變化がないと兒童はあきてしまつて練習をいやがるやうになるのである。又教師も練習を些細なることとして輕視することなく、練習の方法を十分研究すべきである。

(3) 兒童を活動の中心とすべし。

新教授の際でも、兒童の知つて居ることや、少し考へたらわかるやうなことは兒

童をはたらかせる方がよい。練習の際の如きは猶更兒童を活動せしめなくてはならぬ。教師が干渉し過ぎたり、又練習に乘氣にならないで、よい加減にして時間の来るのを待つ様では有力なる練習は出来ない。

練習の巧拙は實に教師の効果を收むると否とに多大の關係あるものなることを思ひ、大にこの點に努勉をのぞむ次第である。

(五) 有機的統一をはかれ。

前後左右の關係即ち教授事項の前後の關係、教授事項と他の教科との關係に注意し、連關をはかるにつとめない。教授は支離滅裂となり、教授の効果は大に滅殺せられる。それであるから一學級受持の教師は自己受持の學年の教科書全部を研究するは勿論、他學年のものをも通讀研究し參考に供することが必要である。細目の活用も大につとめなくてはならぬ。

以上は一般教授に對する余の方針であるが特に歴史教授に於て注意を促しつつある要件は次の如くである。

一、教科書の教材を中心として授け明確に把握せしむることを期すべく、枝葉の微細なることに論及し大綱を失することは避くべし。

一、一課一時代を終る毎に總括を爲すべし。

一、郷土に關係深き事實は稍詳細に説述し既に郷土史談の授けられたる場合にはこれが利用を怠るべからず。

一、年代は紀元によりその重要なるものは記憶せしむべく、卷末の附録は必要に應じ利用すべし。

一、繪畫地圖遺物等の活用は事實を現實的ならしめ兒童をして事實を容易に正確に把握せしむる上に多大の効果あるものなればよく利用につとむべし。

一、史中の人物を批判するには慎重の態度をとるべく個人の感情に基き偏したる斷定を下すことを避くべし。

一、國初より現時に至るまでの事歴を知らしむると同時に忠孝の大義を明にし愛國の精神を涵養することを期すべし。

一、時勢の推移因果の關係を知らしめ處世上道德上の訓誡を與ふることにつとむべし。(教育實習上の注意)。

改訂 新潮を汲める 歴史教授法精義終

冷灰が普通學修業の時代に英國の老紳士にドクトル、サイル先生と云ふのがあつた。萬國史を教授するに先づ第一に教科書を與へた、此書に依つて學生が豫め通讀して置くべき日課が定められたのだが、之を一讀して教場へ出ると先生は定めて暗記的の質問を爲すならんと思つたが、豈料らんやだ、先生は歴史上の事實は逐一暗記するに及ばぬぞ、又此書を暗記したとても歴史の事實は並に止まるものでないぞと宣言した。白髮の童顔に微笑を湛へ、大きな左の手を開き五本の指をテールブル高く掲げて、爾等は歴史を學ぶには「五何」と云ふことを知れば足るのだと云ひ乍ら右の手で力強く其左の五本の指を一つづつゆる／＼と風め始めた。一に曰く何人、二に曰く何時、三に曰く何處、四に曰く何事、五に曰く何故と、此「五何」の大略を知るので充分だ。殊に此最後の「何」に注意し置けば他の「四何」は自ら思ひ出さるゝものだ。と訓諭し、其日に課した歴史の概要を口頭で説明し、最後に尙ほ此史實に就て詳細に知らんと欲せば何々の書物があるかと著者の名と書名とを列叙し其長所短所を示したもので、此先生の教場に入る毎に何時も此の五本の指が我々學生の眼を引いた。此老先生の教場法は三十餘年を隔てた今日尙ほ冷灰の記憶に新なるものがある(江木博士 國民道徳論)

明治四十二年四月五日
 明治四十一年四月十日
 大正二年七月二十五日
 大正二年七月二十日
 印刷發行
 改訂五版印刷發行

定價金八拾錢



改訂
 新編新法
 義精

著者 大元茂一郎
 發行者 目黒甚七
 印刷者 金子久太郎
 印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地 三協印刷株式會社

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
 同南傳馬町一丁目(分店)
 新潟縣長岡市表四ノ町(本店)
 東京市京橋區南傳馬町二丁目
 電話京橋二六三番(分店)
 振替口座二八〇九番(店)
 電話京橋二七四九番(長)
 電話長岡一八番
 振替口座三三三三七番(岡)
 振替口座三六一九番

目黒書店

263,6
119

終

